opusdei.org

黙想の祈り:年間第 17主日(B年)

黙想のテーマ:「先導者はイエス」「〈不可能〉事の歴 史」「奇跡の写真の保存」

先導者はイエス

〈不可能〉事の歴史

奇跡の写真の保存

今日の福音書では、聖ヨハネのパンと魚が増えたエピソードが読まれます(ヨハネ6・1-15参照)。他の福音

と違うところは、食べ物の不足に気であることを分からないまであることを分かたちにない。「このパとです。「このパン・をです。」といってきない。「このパン・をです。」といったいが、「はいったが、「はいったが、「はいったが、であったが、「はいるであったが、「はいるである」である。は何れています。

ないます。とが、私たご存知されてと何だい、私たご存知で見いのでは、私たご存知で見いのではないで、知いないで、知知はいいのではないで、からかいないで、からがいないで、からがいないではないで、からがいないではないがいではないがいではないがいないがはいかがいではないがいではないがいではないがいではないがいではないがいがいがいできるという。

それと同時に、主は、フィリポにされたように、人々の必要性を見たたるまかれまなざしを培うより、まわしてまかれます。自分の事としまかりで見っとといることを知っても、「主は、私たち一人からに主の慈しみに参加するとを望まれるのです」[2]。慈しみはとを望まれるのです」[2]。慈しみは

単なる感情ではなく、行動を伴うも のです。イエスは、あの群衆が食べ ることができるよう、パンと魚を増 やしました。しかし、それだけのこ とに留まりません。イエスは、彼ら が求めていたのは、食べ物のパンを はるかに超えたものであることをご 存知です。つまり、主だけがお与え になれる、愛と希望をもたらす神の みことばに飢えていたのです。それ で、このエピソードの後、永遠の命 のとびらを開くパンについてお話し になります。主にお願いしましょ う。「主よ、単なるパンではなく、 真実の愛であるキリストのパン、キ リストの御体であるパンで養われる ことの重要性を再認識するようお助 け下さい。聖体を忠実に信心深く頂 き、主との親密な一致が、次第に深

まるようお助け下さいしょる。

イエスの質問に、フィリポは「200 デナリオ分のパンではたりないで しょう| (ヨハネ6・7) と答えま す。そこへアンデレが現れ、「ここ に大麦のパン五つと魚二匹を持って いる少年がいます。けれども、こん なに大勢の人では、何の役にも立た ないでしょう」 (ヨハネ6・9) と言 います。これは、今日のミサの第一 朗読の預言者エリシャの召し使い が、20個のパンを見て「どうしてこ れを百人の人々に分け与えることが できましょう | (列王記下4・43)と 言った話によく似ています。この二 つのエピソードは同じように終わり ます。聖ヨハネは「人々は満腹 しし、弟子たちは「五つの大麦のパ ンの残りを集めて、12の籠をいっぱ いにした (ヨハネ6・13) と記して います。また、エリシャの召し使い は、皆が食べて「主の言葉のとお り、彼らは食べきれずに残した」(列 王記下 4・44) ことを認めました。

時に、乗り越えることが難しいよう な現実に直面することがあります。 10個のパンと2匹の魚を群衆の食事 にするような、非常に難しい問題の 解決は、私たちの力だけではできな いことだと思います。初めはフィリ ポのように、理解することができな いか、アンデレのように、ほんの僅 かな力にがっかりしてしまうことで しょう。こんな時には、キリスト教 の歴史を、考えることが役に立つの ではないでしょうか。それは不可能 なことの歴史です。人間的には考え られないようなことですが、特別な 資質に恵まれていたわけではない12 人が、当時の世界の果てまで福音を 述べ伝えたのです。しかし、それに も増して〈驚くべきこと〉が、毎 日、ミサ聖祭で起こっているので す。ほんの僅かなパンとぶどう酒 が、神に変わるのです。

「奇跡は無からではなく、持ってい たものを分かち合った少年の協力で 実現されました。イエスは、私たち が持たないものを頼まれるのではな く、一人ひとりが持っている僅かな ものを差し出すとき、奇跡が実現さ れることを分からせようとなさいま す。神は、私たちの小さな愛の行為 を豊かなものにし、神の賜に与らせ てくださるのです」回。パンと魚を 増やしたことで、イエスが弟子たち に教えようと望まれたのは、仕事の 効果は、善意と熱意だけによるので はなく、神の恩恵によるということ です。主は、あの少年のように、手 にしている5個のパンと2匹の魚を、 主に差し出すようお望みです。後は 主がしてくださいます。

使徒たちは、パンと魚が増えた奇跡 を忘れることはなかったはずです。 後年、迫害や死の危険、見捨てられ るなどのような、より大きな問題に 立ち向かわなければならなかったと き、イエスと一緒だったあの情景を 思い出したことでしょう。あの群衆 にどう対処したらよいか分からず 困った事、手に入れた食物は、ほん の僅かしかないことに神経質になっ た事、人々が意気消沈してしまう事 への恐れなど…。しかし、最後には 皆が満足したことに、どんなにか喜 んだことでしょう。しかも、その残 りが12の籠いっぱいになったので す。5個のパンと2匹の魚で、群衆を まかなうことなど思いもよらない事 でした。

「よく見ると、私たちの生活には奇 跡が溢れており、神の善性のしており、である愛の優しさが満ちたにないまないのことになり無関心のまないます。好奇心を持ちないますることができず、〈感動することを忘れさっては感動することを記した心では感動することを記した心では感動することを記れたいでは感動することを記れたいでは感動することを記れたいでは感動することを記れたいでは感動することを記れたいでは感動することを記れたいます。

などできません。〈感動する〉と は、何と心地良い動詞でしょう。映 画の場面を見るように考えさせてく れます。これが、神の御業に対する 正しい態度です。その御業を頭で映 像化し、心に焼き付け、それを生活 の中で多くの善行を通して表わしま す」い。これが使徒たちの振る舞い 方でした。後年、さまざまな挑戦を 受けた時、あの奇跡の〈場面〉をま ざまざと思い出していました。手段 に不足したり、好機を逸したりする ことで、困ったままでいることな く、全てをイエスにお任せすること を学んでいました。そして、彼らは それを全く確信していたのです。物 事が多少ともうまくいくことはそれ ほど多くなかったのですが、彼ら は、神がいつも付き添っておられる ことを認め、人間としてできること をしていたのです。

この祈りの中で、私たちの生活で実 現された数々の奇跡を、主と共に思

い起こすことができます。使徒たち のような状況において、立ち向かわ なければならない事柄と、私たちの **資質の間の不釣り合いを感じます。** しかし、神がどんなに私たちを助け てくださるかを実感します。主は、 私たちの友情を通して人々に恩恵を お与えになります。私たちは穏やか に落ち着いて、苦しみに対処するこ とができます。イエスが同伴してお られるのを知っているのですから。 聖母は、私たちが、重すぎると感じ るとき喜びを失わないよう、また、 御子が私たちの中で実現された素晴 らしい事柄に感嘆するよう、助けて 下さるでしょう。

- [1] 聖ホセマリア『鍛』341番。
- [2] フランシスコ、一般謁見演説、 2016年8月17日。

[3] ベネディクト十六世、一般謁見 演説、2012年7月29日。

[4] ベネディクト十六世、一般謁見 演説、2012年7月29日。

[5] フランシスコ、「お告げの祈り」でのことば、2023年7月9日。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-nenkann-17shujitu-b/(2025/11/29)